

1. 導入

● 研究の背景

(1) *Buoys*

手話言語では、利き手がサインを表出している間、非利き手のサインが静止した状態で保持され、談話における補助的機能をもつことが知られている (Liddell 1990, Engberg-Pedersen 1994 など)。Liddell (2003) 以来、これは “Buoys” と呼ばれており(本発表では「浮標」と呼ぶ)、次の4タイプが区別されている。

- i. List buoy
- ii. THEME buoy
- iii. Fragment buoy
- iv. POINTER buoy

(2) *Buoys*

- i. Buoys are signs produced with the weak hand, and held in a stationary configuration as the strong hand continues to produce signs.
- ii. Semantically, they help guide the discourse by serving as conceptual landmarks as the discourse continues. (Liddell 2003: 223)

(3) *List buoys*

Signers use list buoys for making associations with from one to five entities. (Liddell 2003: 223)

● 用語

- (4) List buoy (Liddell 2003, Nilsson 2007, Hendricks 2007, among others)
- (5) Enumeration morphemes (Miller 1994)
- (6) COORD-L (Davidson 2012, 2013, Asada 2016)
- (7) 本発表では、“List Buoys”を「列挙浮標」と呼ぶ。

● 研究の背景

- (8) 列挙浮標は、アメリカ手話 (ASL) をはじめとする諸手話言語での研究が進んでいるが (以下、第二節参照)、日本手話 (JSL) に関する研究は未だ少ない (松本 2001 など)。また、従来研究では、浮標の統語特性に関する考察も見当たらない。

● 本発表の目的

- (9) JSL の列挙浮標の意味特性・統語特性を明らかにし、その分布に説明を与える。

2. 列挙浮標についての先行研究

- (10) Liddell (2003) による ASL の研究をはじめ、Miller (1994) (カナダケベック手話)、Hendricks (2007) (ヨルダン手話)、Nilsson (2007) (スウェーデン手話)、Liddell *et al.* (2007) (スウェーデン手話・ノルウェー手話) など諸手話言語での研究が進んでおり、Liddell (2003) が記述している列挙浮標の一連の特性が多くの手話言語で観察されている。

● 列挙浮標の形式的特性

(11) ASL

- i. 利き手が静止している非利き手の指の先に軽く触れ、関連する要素を列挙していく親指もしくは人差し指から始める。
- ii. 非利き手の指先は真っ直ぐ縦に伸ばすというよりは、横向きに伸ばされる
The fingers are oriented **to the side** rather than vertically upward.
- iii. 非利き手と利き手の接触は、利き手の記述に先行することもあれば、後続することもある

(cf. Liddell 2003:224) [太字:YA]

(12) 列挙浮標表現の 2 タイプ:連続型 vs 固定型

List buoys can appear in two different ways: sequentially built lists vs single fixed-length lists.

(Liddell *et al.* 2007: 192-200)

● 列挙浮標の意味的・機能的特性

(13) ASL

列挙浮標は、順序付けられた、もしくは順序付けられていない要素の集合との関連で使用される。

List buoys can be used to make associations with **ordered** and **unordered** sets of entities.

(cf. Liddell 2003:224) [太字:YA]

(14) French Belgian Sign Language (LSFB)

談話の種類によって Liddell (2003) の 4 タイプの浮標の分布が異なる。

Gabarro-Lopez & Meurant (2014), Gabarro-Lopez *et al.* (2016)

(15) LSFB

Intuitively, one may say that list buoys rarely appear in narrative discourses and that these buoys may be found more often in prepared productions rather than in spontaneous ones.

(Gabarro-Lopez & Meurant 2014:49)

3. JSL の列挙浮標

● 調査方法

- (16) デフファミリー出身の日本手話母語話者 10 名 (男性 5 名・女性 5 名) による聞き取り調査を実施した。イラストと手話による説明で文脈を提示し、要素を列挙してもらった。提示した文脈は(20)-(21)の通りである。

(尚、本発表の議論は列挙される要素が名詞句である文例に限り、動詞句や述部の列挙現象については扱わない。)

● 列挙浮標の 2 タイプ

- (17) JSL では、従来研究で議論されている (18i) に加え、(18ii) が存在することが確認された。この 2 タイプを区別するため、本発表では前者を**標準型列挙浮標**と呼び、新しく観察されたタイプと区別する。

● 形式的特性

- (18) i. **標準型列挙浮標**
非利き手の指を一本ずつ開きながら伸ばして表示する。
JSL の場合、母語話者のほとんどが人差し指から始める。
- ii. **内向き型列挙浮標**
非利き手を縦に向け、指を一本ずつ内向きに折りながら列挙するタイプ。
親指から始める。
- (19) 非利き手の指を横向きを開く標準型を使用するサイナーによっては、利き手の人差し指で非利き手の指先に触れた後、軽くはじきながら内側に折り込んでいくタイプの用法も観察された。この用法は、標準型と内向き型の「ハイブリッド」型と考えられる(松本 2001 では、「限定数詞」と呼ばれている)。

● 意味・機能的特性

- (20) 列挙する要素の意味特性
- i. 網羅的かつ順序性あり [+ exhaustive], [+ ordered]
[文脈] 「あなたは 5 人家族です。家族構成を教えてください。」
[文脈] 「野菜を好きな順番に 5 つ教えてください。」
- ii. 網羅的かつ順序性なし [+ exhaustive], [- ordered]
[文脈] 「ここからジュースを作ります。使うフルーツを 5 つ選んでください。」
[文脈] 「これから買い物します。野菜を 5 つ選んでください。」
- iii. 非網羅的かつ順序性なし [+ exhaustive], [- ordered]
[文脈] 「お仕事か学校での仲間のお名前をできるだけ沢山教えてください。」
- (21) 談話タイプ
- i. 記憶想起
[文脈] 「昨日、学会であなたは多くの知人に会いました。30 秒で会った人の名前をできるだけ沢山覚えてください。〈30 秒〉 誰が学会に来ていましたか？」
[文脈] 最近食べた野菜を思い出して日記につけます。日記につけるつもりで、一人でしゃべってください。
- ii. 説明的
[文脈] 「あなたは、レストランのデザート係です。今日のデザートを 4 つ、私に紹介してください。」
- (22) JSL 列挙浮標の特性
- i. 標準型が、順序性を表示する文脈では指は上向きにならない。
- ii. 標準型について、「固定型」と「連続型」(Liddell *et al.* 2007) の 2 タイプが観察された。
- iii. 内向き型は、説明的文脈・順序性を表示する文脈では表出しない。
- iv. 内向き型は、順不同の要素を列挙する・想起補助・記憶確認としての機能をもつ。
- v. 内向き型を一度でも使用した話者は、10 名中 7 名。

(23) JSL 標準型列挙浮標の提示角度（各文脈の出現回数割合）

	列挙する要素の意味特性			談話タイプ	
	網羅的 [+ exhaustive]		非網羅的 [- exhaustive]	独り言・ 記憶想起 monologue/ memory retrieval	説明的 explicative
	順序あり ordered	順序不同 unordered			
上向き	0%	29%	0%	0%	30%
斜め	47%	39%	40%	45%	20%
水平	53%	32%	60%	55%	50%

(24) JSL 列挙浮標の分布（各文脈の出現回数割合）

	列挙する要素の意味特性			談話タイプ	
	網羅的 [+ exhaustive]		非網羅的 [- exhaustive]	記憶想起 memory retrieval	説明的 explicative
	順序あり ordered	順序不同 unordered			
標準型 列挙浮標	85%	76%	50%	55%	100%
内向き型 列挙浮標	0%	21%	10%	25%	0%
列挙浮標 なし	15%	3%	40%	20%	0%

● 標準型列挙浮標 (LB) の統語的特性

(25) 昨日 / 太郎 / [LB₁ 酒 / LB₂ ワイン / LB₃ ビール] 飲む / 完了

‘昨日太郎が酒、ワイン、ビールを飲んだ.’

(26) 昨日 / 太郎 / 飲む / 終了 / 何 / [LB₁ 酒 / LB₂ ワイン / LB₃ ビール]

< 分裂文 >

‘昨日太郎が飲んだのは、酒、ワイン、ビールだ.’

(27) TOP

[LB₁ 酒 / LB₂ ワイン / LB₃ ビール] / 昨日 / 太郎 / 飲む / 完了

< 話題化構文 >

‘酒、ワイン、ビールは、昨日太郎が飲んだ.’

● 内向き型列挙浮標 (LBI) の統語的特性

(28) 昨日 / 太郎 / [LBI₁ 酒 / LBI₂ ワイン / LBI₃ ビール] / 飲む / 完了

‘昨日、太郎が酒、ワイン、ビールを飲んだ.’

(29) 昨日 / 太郎 / 飲む / 完了 / 何 / [LBI₁ 酒 / LBI₂ ワイン / LBI₃ ビール]

< 分裂文 >

‘昨日太郎が飲んだのは、酒、ワイン、ビールだ.’

- (30) ?? _____ TOP
 [LBI₁ 酒/LBI₂ ワイン/LBI₃ ビール] / 昨日 / 太郎 / 飲む / 完了 < 話題化構文 >
 ‘酒、ワイン、ビールは、昨日太郎が飲んだ.’

● 本稿の提案

- (31) (25)-(29)の例は、JSL 標準型・内向き型列挙浮標が接続する名詞句は構成素を成していることを示す。
 この事実は、これらの構成素が等位構造を成していることを示唆する。

- (32) 本発表の提案 (1)

名詞句を列挙する JSL の列挙浮標は、等位接続詞である。

- (33) 標準型

a. * [LB₁ 酒] 昨日 / 太郎 [LB₂ ワイン/LB₃ ビール] 飲む / 完了

b. * [LB₁ 酒/LB₂ ワイン] 昨日 / 太郎 [LB₃ ビール] 飲む / 完了

- (34) 内向き型

a. * [LBI₁ 酒] 昨日 / 太郎 [LBI₂ ワイン/LBI₃ ビール] 飲む / 完了

b. * [LBI₁ 酒/LBI₂ ワイン] 昨日/太郎 [LBI₃ ビール] 飲む / 完了

➡ 等位構造制約 (Ross 1978) 違反

- (35) 等位接続詞のタイプ

Representative coordinators (Haspelmath 2004)

-ya and -yara in Japanese

Non-exhaustive conjunctions (Smith & Kobayashi, to appear)

-ya, -toka, -tari in Japanese

Exhaustive coordinator (Asada 2014)

repetitive -to in Japanese

- (36) 本発表の提案 (2)

名詞句を列挙する JSL の内向き型列挙浮標は、非網羅的等位接続詞 (non-exhaustive coordinator) である。

- (37) 内向き型

pt1 / 買う / 何 / [LBI₁ ねぎ/LBI₂ なす/LBI₃ 白菜/LBI₄ トマト/LBI₅ レタス] / *{5 / など}

‘私が買うのは、ねぎ、なす、白菜、トマト、レタス(の5つ/など)だ.’

- (38) 内向き型

学会 / 来る / 誰 / [LBI₁ 田中/LB₂ 林/LBI₃ 佐藤] / *{多分/忘れた}

‘学会に来ていたのは、たぶん、田中、林、佐藤だった.’

➡ 自然な発話では、文末表現が必要である

- (39) 非網羅的等位接続詞 - とか (日本語)

*Taro -toka -wa ki -ta.

(Smith & Kobayashi, to appear)

4. 結語

- (40) i. JSL の観察に基づき、列挙浮標の形式的特性・意味機能的特性を記述した。
 ii. 従来研究では記述されていなかった新しいタイプ「内向き型列挙浮標」の存在を確認した。
 iii. JSL の列挙浮標 2 タイプの分布に関して説明を与えた。

5. 今後の研究課題

- (41) i. JSL 列挙浮標が形成する等位構造の統語分析 (集団的解釈・配分的解釈の確認)
- ii. 内向き型列挙浮標は、JSL 以外の手話言語に存在するのか
- iii. 数を数えるときのジェスチャー (特に自己指向性ジェスチャーとの関連 (Kita 2000 など参照) ・言語化する過程について (日本語話者のジェスチャーとの比較))
- iv. JSL における数量詞との関連 (指の方向性の使い分け)

謝辞

本研究の遂行にあたり、多くの日本手話ネイティブサイナーの方より大変貴重なアドバイスをいただいた。また、本稿の執筆に際しては、TOSLL (東京手話言語学研究会) のメンバーから貴重な助言をいただいた。ここに感謝の意を表したい。本研究は JSPS 科研費 JP 16K02638 の助成による。

参考文献

- Asada, Yuko. 2014. On the nature of the repetitive coordinator-*to* in Japanese. *Gengo Kenkyu* 145: 97–109.
- Asada, Yuko. 2016. Tooisetuzoku no ippan yooohoo ni tuite. [On general use coordination], Oral presentation at the 153rd meeting of the Linguistic Society of Japan, Fukuoka University.
- Davidson, Kathryn. 2013. ‘And’ or ‘or’: General use coordination in ASL. *Semantics & Pragmatics*. Vol. 6:1–44.
- Engberg-Pedersen, Elisabeth. 1994. Some simultaneous constructions in Danish Sign Language. In Brennan, Mary & Turner, Graham (eds.), *Word-order issues in sign language*, 73–87. Durham, England: International Sign Linguistics Association.
- Gabarró López, Silvia. & Meurant, Laurence. 2014. The use of buoys across genres in French Belgian Sign Language (LSFB). *Proceedings of COLDOC 2013*, November 13–14, Paris.
- Gabarro-Lopez, Silvia, Meurant, Laurence, & Barberà Altimira, Gemma. 2016. Digging into buoys: their use across genres and their status in signed discourse. Poster session presented at TISLR 12 - 12th International Conference on Theoretical Issues in Sign Language Research, Melbourne, Australia.
- Haspelmath, Martin. 2004. *Coordinating constructions*. Amsterdam: Benjamins.
- Hendriks, Bernadet. 2007. Simultaneous use of the two hands in Jordanian Sign Language. In Myriam Vermeerbergen, Lorraine Leeson/Onno Crasborn (eds.), *Simultaneity in Signed Languages: Form and Function*. 237–255. Amsterdam: John Benjamins.
- Kita, Sotaro. 2000. How representational gestures help speaking. In D. McNeill (eds.), *Language and Gesture: Window into Thought and Action*, 162–185. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小谷克則 2009. 「日本手話における等位構造」『日本手話学会第 35 回大会予稿集』 33–36.
- Liddell, Scott. 1990. Four functions of a locus: Reexamining the structure of space in ASL. In Ceil Lucas (ed.), *Sign Language Research: Theoretical Issues*. Washington, DC: Gallaudet University Press, 176–198.
- Liddell, Scott. 2003. *Grammar, gesture, and meaning in American Sign Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Liddell, Scott, Vogt-Svendsen, Marit, & Bergman, Brita. 2007. A crosslinguistic comparison of buoys: Evidence from American, Norwegian, and Swedish Sign Language. In Myriam Vermeerbergen, Lorraine Leeson/Onno Crasborn (eds.), *Simultaneity in Signed Languages: Form and Function*. 187–215. Amsterdam: John Benjamins.
- 松本晶行. 2001. 「実感的手話文法試論」全日本ろうあ連盟.
- 松本忠博, 原田大樹, 原大介, 池田尚志. 2006. 「日本語を援用した日本手話表記法の試み」自然言語処理, 13 (3), 177–200.
- Miller, Christopher. 1994. Simultaneous constructions in Quebec Sign Language. In Brennan, Mary & Turner, Graham (eds.), *Word-order issues in sign language*, 89–112. Durham, England: International Sign Linguistics Association.
- Nilsson, Anna-Lena. 2007. The non-dominant hand in a Swedish Sign Language discourse. In Myriam Vermeerbergen, Lorraine Leeson/Onno Crasborn (eds.), *Simultaneity in Signed Languages: Form and Function*. Amsterdam: John Benjamins. 163–185.
- Ross, John. 1967. Constraints on variables in syntax. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass. (Published as *Infinite syntax!* Norwood, N.J.: Ablex (1986))
- Smith, Ryan Walter. & Ryoichiro Kobayashi. To appear. Focusing on coordination: The case of Japanese *-toka* and *-tari*. *Proceedings of the GLOW in Asia XI, MITWPL*. National University of Singapore.